

2007年11月7日 テスト対象となる性能指標

KFシステムクリエイターでは、5つのシステム毎に標準で58種類×3(売買)システム=174個の性能指標に対して最適化を行なうことができます。
それに加えて、テスト期間を自由に設定したり、追加システムを付加したりすることで、元となる銘柄の多様性を含めると、まさに無限に近い数のオリジナルシステムを作成することができるわけです。

しかも、これは標準的な自由度であり、工夫次第では更なる多様性を実現することが可能です。ここでは、最適化の対象(テスト対象)となる性能指標について、更なる応用を考えてみたいと思います。

テスト対象は、通常は冒頭に掲げた174個の性能指標の中から選択するわけですが、実はそれだけに限りません。システムシート上で上記以外の指標を算出し、それをを用いることも可能ですが、もっと簡単で有効な方法としては、上記の174個の性能指標間で演算を行った結果をテスト対象にすることが考えられます。

それは、リスク管理という観点からも有効な手法となります。

例えば、先日来ブログで考察している、ATRを用いたリスク管理手法に関して言えば、その前提として、リスクを固定化する必要があります。そのためには、ストップ基準を設けることが要求されます。

ストップ基準そのものは、損益率基準の2nd Layerシステム11を用いることで設定できますが、そのストップ基準によって、そのシステムを用いた場合の最大建玉数が異なってくるわけです。
例えば、損益累計が最大となるようにパラメータを設定したとしても、最大損失率が大きければ、十分な建玉数を確保できません。

逆に言えば、損益累計が最大にならなくても、それを補うだけの最大損失率の縮小を実現できれば、建玉数を増やすことにより、同一リスクでより大きいリターンを期待することが可能となります。

例えば、テスト対象として、買い損益累計をドテン最大損失率で割った値(=F21/H39)を用いれば、それが最大となる条件を採択することで、数値的には損益累計の減少分を建玉可能数の増大でカバーできます。

ここで、なぜドテンシステムの最大損失率を用いるかと言いますと、2nd Layerシステムを適用する場合、売りシステムが買いシステムの性能に影響を与える場合があるからです。

したがって、買いシステムの性能に着目したとしても、最大リスクを規定する指標としては、買いと売りの最大公約数であるドテンシステムの指標を用いることが望ましいということになります。

なお、もう少し平均的な性能を最適化したいのであれば、期待効率を最大ドロダウで割った値をテスト対象にしてもいいかもしれません。これは、「タートル流投資の魔術」(徳間書店刊:カーティス・フェイス著)に紹介されているR-キューブドに近い性能指標になります。

上例以外にも、様々な複合指標を考えることができます。それらをテスト対象とすることで、より堅牢なシステムの構築が可能になるかもしれません。